

戦時下のカートゥーンにおける見立て表現についての研究 —『漫画』(1940-1951)を事例として—

京都造形芸術大学文明哲学研究所 小野塚佳代

1 目的

諷刺漫画家にとって不遇な時代であったとされる戦時下の表現の中に、「技」としての自由もあったのではないかということを提起する。この報告の目的は、戦時下に漫画家が描いた社会、政治とは何かについて議論するとともに、その表現の可能性について考察することである。

2 方法

データとして1940年から1951年にかけて発行され、諷刺漫画家、近藤日出造が1942年10月以降編集人を務めた月刊雑誌『漫画』における、特に戦時中の漫画表現の特徴と近藤の作家性について調査を行った。戦中のプロパガンダ漫画は、戦禍に傷ついた兵士や庶民に目を向け戦争の惨さを描いた漫画と、翼賛的で戦争賛美を謳った漫画の二つに大別される。『漫画』においては戦後庶民の慰安を目的とした構成がなされるまで、情報統制によって戦時体制下の方向性は後者に一貫された。そこでは近藤の漫画家としての技が發揮されたが、この間の表現の特徴として「非人間化」(井上2002)、見立て表現は特に効果的に用いられている。発行された『漫画』104冊の中で全体に415点の見立て表現が確認でき、戦中195点・戦後220点の割合であった。年毎の雑誌総頁数による割合から見れば1943年、1944年に最も多い頻度で見立て表現が表れた。

3 結果

分析の結果、戦中、戦後では同じ見立て表現でもその使用意図が大きく異なることがわかった。戦中は敵国の指導者、兵士を「人間に非ず」として非人間化して描いたのに対し、戦後は自國の指導者を嘲笑的に、または読者の笑いのために動物化が面白おかしく用いられる例も増えた。また、食べ物や乗り物といった生活の向上に基づいたモノへの見立てが増えたことも戦中との違いである。戦後を含めても最も見立て表現が頻出した1943年、1944年は戦況の激しかった年代であり、プロパガンダ表現も激化した。これと見立て表現の表れが呼応したことは特徴的である。そして戦中の見立て表現220点のうち近藤の筆によるものは35点であった。これは他の掲載漫画家の作品について同じ期間で比較しても、例えば横山隆一13点、田内正男12点、横井福次郎11点などと比べて多い。こうした戦中の『漫画』における近藤の作品には漫画としての迫力が認められる一方で、その時局に合わせて当然という無責任性についての批判がなされており、「モチーフにかたよった図解的な描写の誇張が目立つだけ」で、「マンガから政治が失われていった」様子を表しているとされた(石子1970)。戦中の『漫画』に多く見立て表現が表れ、うち多くを近藤が手掛けたことと近藤が本来似顔を得意とした漫画家であることは無関係ではなく、更に「国民」という立場と「敵国」という攻撃の対象が限られた枠として保証されたことでより技巧としての成立が活かされたと捉えることができる。

4 結論

ここでは表現の技としての自由あるいは成立と、思想や主張といった部分での自由との乖離が見られる。表現者、特に諷刺漫画のようなジャーナリズム的要素を多分に含んだ作品においてこの二つは同居するものと考えられがちだが、真実はそうではなく、漫画家の立ち位置の選択が喪失することによってその作品から「政治が喪失する」プロセスを戦時下の漫画は提示している。

文献

- ・小野塚佳代,2018,近藤日出造と雑誌『漫画』—非人間化の漫画表現—,『マンガ研究』vol.24,151-163,ゆまに書房
- ・井上裕子,2002,戦時下の漫画—新体制期以降の漫画と漫画家団体—,『立命館大学人文科学研究所紀要』,(81):103-33
- ・石子順造,1970,『現代漫画の思想』,太平出版社